

古い町並みに生きる女性の意思

——長野県木曾路の奈良井宿、平沢集落の事例からの考察——

Intention of female residents in old houses and streets: Narai-juku and Hirasawa village along Kisoji (Kiso-rode) in Nagano Prefecture

荒井 浩幸

キーワード：女性，関係，重伝建地区，よそ者，誇り

〈Abstract〉

Male residents have played the important role in preservation movements for old houses and streets in the Narai area in Shiojiri City, Nagano. After being designated as a National Important Preservation District for Groups of Historic Buildings, the area became problematic for daily shopping. Retail stores for residents changed into venues for tourists such as souvenir shops. Some female residents spending long hours in household chores are dissatisfied with the structure of their homes, but additions and renovations are restricted in the preservation district.

The question is how the female residents in the district with the preservation requirements build relationships with each other and with the district and function in such a situation. In this thesis, I will investigate the intention to belong and to become a member of the community of the female residents living in two Preservation Districts: an historic post town, Narai, and a neighboring town famous for its lacquerware, Hirasawa, along Kiso-rode in Nagano Prefecture.

Female residents gain various experiences in the town where they live after marriage, and they form new memories. The female residents' pride to the area has developed through memories with family, local residents and travelers in the old streets and houses.

As residents who moved from other towns have fewer complex relationships in the community, these women can be productively involved in the local community. There is no difference in pride to the area between residents who were born and raised in the town and those who moved from other towns when they have the intention to belong and to become a member of the community. The role of the female residents with a perspective of themselves as a resident and as a member of the community will increase in today's rapidly changing society.

Pride to the area could be an important element required for inheriting the old streets and individual houses, which function as a core in the relationships between residents or between residents and strangers including travelers and new residents.

目次

はじめに

- I 先行研究の検討と調査地の概要
 - 1 先行研究の整理と課題
 - 2 奈良井、平沢の概要
 - 3 奈良井の空き家の状況
- II 女性の関係の変化
 - 1 平沢の漆器産業と女性の役割
 - 2 奈良井の通婚圏と葬式へのかかわり
 - 3 奈良井の50代女性の意思と実践
 - 4 有志のグループ「ほのか会」の活動

Ⅲ 家族、住民、よそ者との関係

- 1 漆器産業と平沢の展望
- 2 奈良井の新しい関係
- 3 助け合う関係と「うたかたのような家族」
- 4 新住民の「覚悟」と家の継承

Ⅳ 地域への「思い」から「誇り」への転換

- 1 自伝的記憶の重層化
- 2 地元に着目した女性の視点

おわりに

はじめに

東日本大震災という未曾有の災害以降、「絆」や「つながり」といった言葉が耳目にふれるようになった。内山節は、「私は人間の本質を関係としてとらえています。[中略] 関係をつくり、コミュニティを生み出しながら自分たちの存在の場所を形成していくことは、たんなる手段ではなく、人間の本質に属することのはずなのです」と述べている [内山 2012 : 140]。

筆者はこれまで、古い町並みの保存への住民の合意形成と保存後の暮らしの変容について、調査・研究を行ってきた [荒井 2017]。

古い町並みを保存する伝統的建造物群保存地区 [以下、重伝建地区と略す] に選定されている木曾路（長野県木曾地方の旧中山道）の旧奈良井宿（塩尻市）の事例では、町並み保存運動において、地区の男性が重要な役割を担ってきた。町並み保存に関する筆者の聞き取り調査では、奈良井の女性は保存運動に対し、夫や父親に任せていたか、あるいは旧中山道に面していないところに住んでいるといった理由で、無関心だったという回答が多くを占めた。

しかし、重伝建地区になってから、地区内の住民向けの店が旅行者を対象にした土産物店などに代わり、「買い物難民」という言葉が聞かれるようになる。また、家の増改築にも制約があるため、家事をこなすことが多い女性に、家屋に対する不満の声も聞かれた。

重伝建地区に生きる女性たちはどのような関係を築き、役割を果たしてきたのであろうか。そして、その活動の根源は何か。

事例として、木曽路にある旧宿場町の奈良井と隣の集落で漆工町（漆器産業の町）である平沢¹⁾の2か所の重伝建地区で暮らす女性の諸相から、内山のいう「人間の本質」である「関係」を軸にして探っていきたい。

具体的には、Ⅰ章で先行研究と調査地を概観し、Ⅱ章で平沢と奈良井の二つの地区の住民の語りを紹介する。そして、Ⅲ章でⅡ章の事例の分析を行い、Ⅳ章で考察を加えていく。

I 先行研究の検討と調査地の概要

1 先行研究の整理と課題

戦後、日本は高度経済成長期を迎え、世の中は大きく変容していき、人間関係は希薄化が進んだ。白水忠隆は新聞記者時代に、「現実の社会は、1人ひとりが孤立したまま、不安や不信ばかりが高まっている」ように映ったと述べている〔読売新聞生活情報部編 2008：4〕。

イエに目を向ければ、近代家族ともいわれる、核家族化が進んだ。その近代家族も揺らぎ始め、イエが多様化する。今日的な問題として、少子化、(超)高齢化、晩婚化、非婚化、さらにはジェンダーなどが話題となっている。

「場と個人をめぐる方法的態度」として和田健は、「総合して、今後の民俗学が目指す社会研究は、家、個人のつながりのありかを再発見、再評価し現状を認識し、社会集団や個人の主体的判断に対して考察するところに意味を持つ」ことを指摘している〔和田 2010：70〕。

柳田國男は「家永続の願い」を唱え、民俗学におけるイエの研究では、世代を超えて存続されていくことに重点が置かれてきた。

倉石あつ子は長野市稲葉地区の報告のなかで、「稲葉のある家では、娘が2人ともよそへ出てしまい、両親だけが家を守っている。かつてのように家はぜひとも継承させていかなければならないものとは考えなくなり、むしろ両親亡きあとにはどう処分するべきかを考えなければならない状態も生まれて

いる」ことを述べている [倉石 2009 : 128-129]。

倉石の記述からは、従来の民俗学のイエの概念ではとらえられない状況が進行しており、いわゆる核家族、近代家族の現状を示しているといえる。

津上誠は近代家族に対し、「うたかたのような家族」という概念を示している。「うたかたのような家族」とは、家業をもたず、子が将来どこで何をして暮らしているのかもわからない状況のなかで、男と女が夫婦になることから始まり、双方が死ぬと終わってしまう家族のことである [津上 2013 : 307]。

小池誠と信田敏宏は、「日本において、『家（イエ）』は単なる建築物を指すだけでなく、家屋に住む人びとの集団を指す語であり、さらに先祖も含むような超世代的存在を意味している」と述べ、その上で、新たな見解を加えている。過去から未来につながる通時的な永続性を前提にし、構成員は何らかの親族関係で結ばれた人びとである「法人としての家」と、共時的なつながりを重視し、必ずしも家族または親族という言葉では括れない居住単位も含みこむ「場としての家」という概念を提示している [小池・信田 2013 : 1-6]。

小稿では引用文を除き、小池、信田がいう「法人としての家」をイエとし、「場としての家」または住居そのものを指す場合に家、あるいは家屋と表記することにする。

イエ、家の問題を考えると、そこに密接にかかわってきた女性の役割について、先行研究をみていきたい。

前出の倉石は長野市内の女性の諸相から、「女性が働きに出ることはかならずしも家計の足しにといった目的ではなくなり、現在では自分のために、そして働くことで生きがいを感じていたいといった目的に変化しつつある」と述べている [倉石 2009 : 138]。

安室知は長野県北信の農業集落にある U 家に残された農業日誌を分析し、「家事労働は稼ぎか」という問いを發している。U 家の日誌には、家事労働が農事労働に並列して記され、「男性とほぼ同時間の農事に従事しているのにもかかわらず、何ら斟酌なく家事は女性が行なうものとなっているのである。とくに一家の主婦たる母についてはその傾向が強く、農事労働と家事労働との合計は年間 3049 時間にも達する」ことを明らかにしている [安室 2003 :

117-119]。

仮に今の勤め人の1日の労働時間を8時間とし、年間の出勤日数を250日とすると、2000時間となり、通勤時間などを考慮しないにしても、家事労働を含めるとU家の主婦の労働時間がいかに長いかがわかる。

同様に、蓬田伸光は青森県のある町で山仕事の参与観察を行い、「山での仕事の場面だけでなく、家での場面にも注目すれば、その負担は男たちよりも女たちのほうが大きいといえる。女たちのこのような負担は、おもてにあらわれることがなく、外部の者にはこれまであまり知られることがなかった。一見、男の仕事場と思われがちな山仕事が、じつはさまざまな点で女たちによってささえられている」と、蓬田は安室と同様の見解を述べている。そして、「男とおなじように仕事ができる」「いっしょに仕事をするなかまたちと話をする」「こどもや孫のためにがんばる」ことが女性たちの「やりがい」になっていることを、蓬田は明らかにしている [蓬田 2012 : 132-143]。

以上、労働と女性との関係のみてきた。それでは重伝建地区の住民、とりわけ女性はどのような関係を築いているのだろうか。

町並みという空間そのものを文化財ととらえる重伝建地区制度においては、制度を構築し適用させるよりも住民の合意形成が必要で、住民主導の側面も強い。個々の古い家屋の集合体として、重伝建地区という「地域社会」が成り立っていると見える。

鈴木裕範は大阪府富田林市の寺内町における重伝建地区選定の動きについて、住民の側に目を向け、地域の諸問題に対応する女性の活動の重要性を指摘している。とくによそ者の女性が内外で出会った女性たちと協働で活動することで、地域に人と人との新たなつながりが生まれているという [鈴木 2010 : 671-683]。鈴木の研究からは「やりがい」に加えて、もう一つ「よそ者」²⁾が重要な要素であることがうかがえる。

一方で後藤知美は、女性たちによるある町並み保存活動の事例から、婦人会、仏教婦人会、商工会婦人会といった「選べない縁」としての家や地域社会と違い、町並み保存会のような女性たちが形成した集団である「選べる縁」では、家か地域社会か、という切り分けをして女性の生活を捉えることの難

しさを指摘する。後藤によると、「選べる縁」の町並み保存会が瓦解していったきっかけは、住民の意見を二分した行政による港の整備計画であったという〔後藤 2018：188-203〕。後藤の事例からは地縁という「選べない縁」とは異なり、「選べる縁」では家や地域社会のはざままで女性個人が、和田のいう「主体的な判断」をすることが難しいことがわかる。

和田は、「『行政と民俗』を二項対立的な見方、もっと大きくいえば支配側と被支配側という概念に硬直化しない見方を意識する必要もあろう」と述べている。「『公』と『私』の概念では括れない『共』の側面で見ることの重要性」から、「共的空間とそこに住まう人々の意志を読み取ることが重要である」と指摘している〔和田 2010：65-67〕。

重伝建地区という「共的空間とそこに住まう人々の意志」を読みとることで、内山のいう「人間の本質」である「関係」の一端を知る手がかりになるのではないかと考える。なお、小稿では意志とあわせて、意思（考え、思い）も含むものとする³⁾。

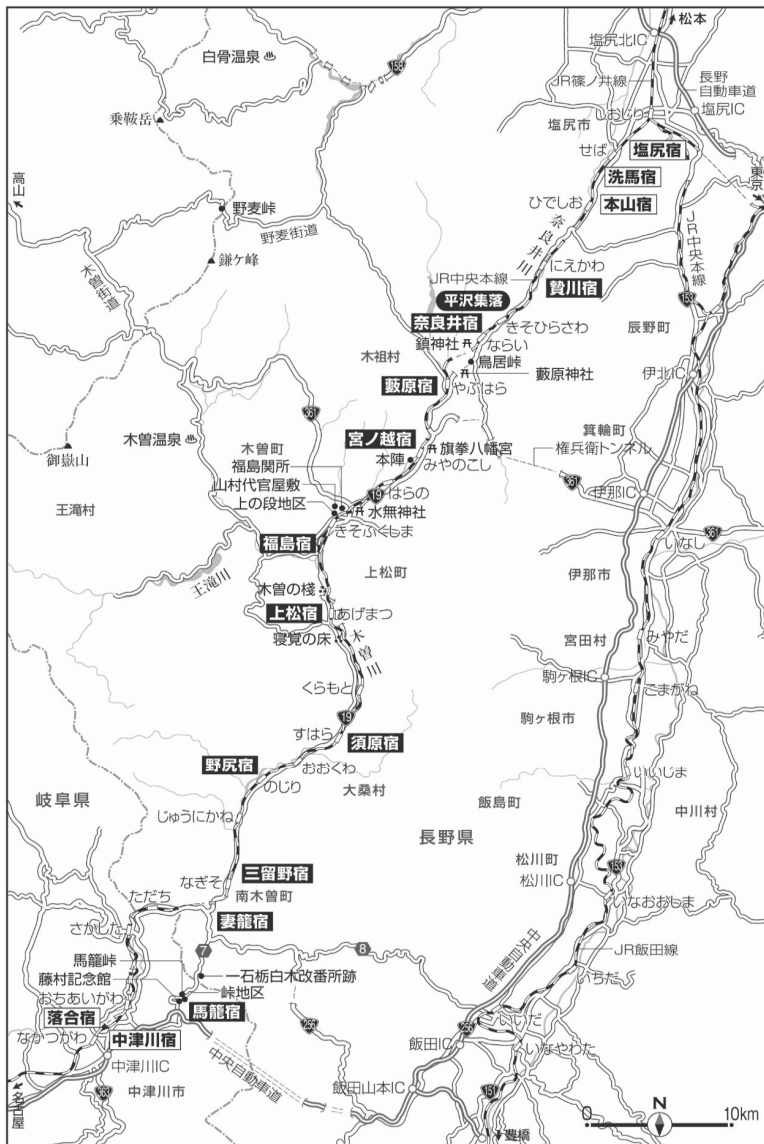
2 奈良井、平沢の概要

慶長6（1601）年、江戸幕府により五街道が制定されると、木曾路には日本橋側から（北から）^{にえかわ}贅川、奈良井、藪原、宮ノ越、福島、^{あげまつ}上松、須原、野尻、^{みどの}三留野、^{つまこ}妻籠、^{まごめ}馬籠の11の宿場が設置された〔図 参照〕。奈良井は塗り櫛、曲げ物作りが盛んで、南に木曾路の難所の一つ、鳥居峠（標高 1197 m）を控え、江戸時代には、「奈良井千軒」と呼ばれるほどのにぎわいをみせたといわれている。

天保14（1843）年の調査を記録した『中山道宿村大概帳』によると奈良井には、本陣1、脇本陣1、旅籠5、家数409が存在し、人口2155人とある〔児玉 1971：319-324〕。

約1 kmにわたり、今も千本格子、葺戸、猿頭などがある建物が残る。昭和53（1978）年に重伝建地区に選定された。

平沢集落は贅川と奈良井の間に位置し、慶長3（1598）年に中山道が奈良井川の西岸から東岸に付け替えられた後に成立した奈良井の在郷町である〔奈



〔図〕 木曾路地図 [国土地理院、木曾観光連盟のホームページをもとに市岡雅代が作成]

良文化財研究所・楢川村町並み文化整備課編 2005: 2]。その後、平沢では漆器産業で発展し、漆器職人が多く住んでいる。漆工町として、平成 18 (2006) 年、重伝建地区に選定された。現在、重伝建地区内には約 65 の漆器店が軒を連ねる。

平成の大合併まで、上記の 11 の旧宿場町は木曾郡に属していた。贅川、平沢、奈良井などがある楢川村は、平成 17 (2005) 年に塩尻市と合併した。塩尻市社会教育課によると、平成 29 (2017) 年 4 月 1 日の時点で、平沢の重伝建地区には家屋や蔵などを含めた建造物が約 650 棟あり、世帯数 178、人口約 450 人で、同じく奈良井の重伝建地区では、約 680 棟、216 世帯、人口約 520 人であるという。

3 奈良井の空き家の状況

重伝建地区に選定後、奈良井の住民の間には古い町並みを守っていくため、建物を「売らない・貸さない・こわさない」という暗黙の了解が存在してきた。そのため、空き家があっても基本的には地区外の人に移り住んでくるようなことはなかった。

しかし、地区内で空き家が増えていくなかで、「家を貸さない、売ってはいけないとなっているが、貸したりしていかないと、年寄りばかりで 10 年後はどうなるのか。もっと若い人たちが住んでくれたらと思う。ヨソの人たちにもきてほしい」(昭和 20 (1945) 年生まれ、女性) といった話はこれまで複数の住民から聞いてきた。

平成 30 (2018) 年 1 月 18 日付の地域紙『市民タイムス 塩尻』で、塩尻市振興公社が奈良井の空き家を紹介し、7 軒中 6 軒に買い手がついたと報じている。そして、「買い手の半数は東京など市外から移住となる若い夫婦で、大半が住居兼店舗とする意向を持っており、宿場の活性化につながりそうだ」としている [市民タイムス 2018: 1 面]。

奈良井の大きな課題である空き家に塩尻市が乗り出した格好である。

筆者は平成 30 (2018) 年 8 月に住民の協力を得て、奈良井の重伝建地区のうち、北の JR 奈良井駅から南の鎮^{しずめ}神社までの旧中山道に面した建物の空き家

の状況を調査した。当該地には約 1 km にわたり、222 軒の家屋が確認できた。

222 軒の内訳は、常に住んでいる家 157 軒、「半空き家」（ふだんは空き家だが盆や正月などに帰省してくる、あるいは所有者がいる家）21 軒、空き家 31 軒、その他（住居として利用されておらず、ガレージ、倉庫、店、資料館などになっている建物）13 軒であった。

空き家について、塩尻市振興公社では、「今後も空き家解消の取り組みを進めたい」としている。これから奈良井では、近年例のなかった新しい住民〔以下、新住民という〕を迎え入れることになる。

II 女性の関係の変化

1 平沢の漆器産業と女性の役割

平成 8（1996）年に発行された『木曾・榑川村誌 5 現代』には、主婦に関するアンケートが掲載されている〔榑川村誌編纂委員会編 1996：921-955〕。

それによると旧榑川村では、平成 2（1990）年に榑川村誌編纂委員会を通じ、榑川村の調査可能な全世帯に調査表を配布し、アンケート調査を行った。

その結果の一部をみると、主婦の勤め先として、漆器製造販売業 138 人、機械部品製造業 60 人、サービス業 38 人、漆器を除く小売り卸業 27 人、食品製造業 10 人、木工業 10 人の順になっている。勤め先の所在地としては、平沢 117 人、奈良井 61 人、旧塩尻市 51 人、贅川 43 人である。平沢、奈良井、贅川に住む主婦たちは、平沢では漆器製造販売業、旅行者が訪れる奈良井宿ではサービス業、贅川宿では旧塩尻市や松本市に勤めに出て、機械部品製造業、食品製造業に携わっていたのではないかと考えられる。

次に勤めに出る目的をみると、「生計を維持する」約 50%、「生活の豊かさを増す」24%、「個性や力を発揮する」7%、「目的内容は別として外に出る」4%などである。

当時は「生活するために」働く主婦が多く、「やりがい」や「生きがい」といったことがみえてこない。なお、男女雇用機会均等法が施行されたのは、昭和 62（1987）年で、その後、平成 9（1997）年と平成 18（2006）年に大幅

改正されている。

これまで平沢の女性は、漆器産業と具体的にどのようにかかわってきたのであろうか。平成 30（2018）年 9 月に 2 人の住民から聞き取り調査を行った。

（1）漆器職人の妻・A さん（昭和 17（1942）年生まれ）の語り

夫は昭和 13（1938）年生まれである。昭和 30 年代まで職人は行商に出かけていた。以前はセールス箱（見本箱）に漆器を入れて各地に営業に行った。流通が発達していなかったので、商品を見せ、その場で注文をとり、家具屋と提携して、駅の貨車や「マルツウ」（日通）などで荷札を付けて漆器を発送した。祖父は紀州に行商に行き、財を成した。

経理は女性（妻）が担い、荷造りも女性（妻）が手伝った。昔の冬場は、男は火鉢で暖をとりながら仕事をしていたが、水仕事など女はつらかった。嫁いだころは水道管が凍るので、水をためておき、柄杓で汲んでいた。

先日、勉強会があって出席したが、もう年なので、今からどうこうしようという気力、体力はない。子どもに継がせたくても、漆器が売れないのではしょうがない。子どもたちにはすでにやりたいことがあり、それぞれ仕事に就いている。以前は、子どもたちの好きな道に進んでほしいと思っていたが、今にしてみれば、3 人いる息子のうち、誰か 1 人でも家業を継いでくれたらと思うことがある。

（2）漆器問屋・B さん（昭和 31 年（1956）生まれ、男性）の語り

先々代まで業務用の漆器を作り、従業員（雇っている職人）は多かった。先代は B さんの母が務めた、B さんの母の兄弟は戦死し、姉 2 人がいたが三女の母が家業を継ぎ、婿である父は郵便局に勤めていた。

昭和 41（1966）、昭和 42（1967）年ごろ、母の意向で店舗を構えた。平沢では店舗型の初めである。国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンのころ（昭和 40 年代後半から 50 年代前半）、平沢に客が訪れた。それから平沢に漆器店が増えていった。当時は今のような家並みではなく、畑や普通の住宅も点在していた。

職人の妻は事務の仕事を担当した。しかし、職人の仕事は2人で1組なので、妻は事務以外にも、漆器作りの下仕事をし、夫が仕上げを行った。(さび) 研ぎは女性の仕事でもあった。朱と漆を混ぜる「ネリ」は半日かかる力仕事である。女性は、商売・店の切り盛りもしていた。

以上は今から35年くらい前までのことである。その後、景気が悪くなって量的に職人1人でこなせるようになり、今は、女性は外へパートなどに出かけている。

高度経済成長期のころが漆器産業のピークで、「(膳など) 3本足でも売れる」といわれた時代だった。景気がよかったころは自分たちのことで精いっぱい、先のことまで考える余裕がなかった。あわせて、徐々に需要が落ちていったため、職人たちに危機感がなかった。

漆器産業に大きなダメージを与えたのは、電子レンジ、食器洗浄機といった家電製品の普及である。女性が外で勤めるようになり、家電製品の開発が進んだが、電子レンジや食器洗浄機は漆器を傷める。あわせて、食器を使って食事をする機会が減り始め、また家への来客も減り、たとえば以前は1軒で10個の漆器を購入していたのが、2個で足りるようになってしまった。

27歳の娘は、普段家業の事務をしているが、蒔絵の勉強中でもある。今の世の中、「百人百色」で、流行の周期も短くなっている。伝統はそのときそのときで変わっていくものである。次の代は次の感覚で、「伝統」をつなげていってもらえればよいと考えている。

ここまで平沢の2人の住民の話を取り上げ、漆器産業の移ろいをみてきた。

それでは、旧檜川村の女性たちは仕事以外でどのような関係をもっていたのであろうか。次節では奈良井の通婚圏、葬式の諸相から、主に戦後の女性の地域のかかわりの変化についてみていくことにする。

2 奈良井の通婚圏と葬式へのかかわり

「隣の宿場とは仲が悪く、その一つ向こうの宿場から嫁にくることが多い」と以前、奈良井の住民から聞いたことがある。隣の宿場と仲が悪い理由とし

て、江戸時代からの宿場同士での競争までさかのぼって考えることもできる。たとえば、Cさん（昭和8年（1933）生まれ、男性）は、「江戸時代、材木の伐採量の許可が奈良井は木曽路の宿場町のなかで最も多かった⁴⁾」ので、近隣にやっかみや敵対心がある」と述べている。

Dさん（昭和2（1927）年生まれ、男性）は、明治以降も「藪原は白木の櫛、奈良井は曲げ物と塗り櫛、平沢は漆器と、それぞれ別の商売をやって、お互いに張り合って発展してきた」ことを挙げている。

Dさんによると、Dさんの親以上の世代は地区内の結婚だった。Dさんのころから、他の地区から嫁がくるようになったという。また、Eさん（昭和15（1940）年生まれ、男性）は、「鉄道が敷かれるまでは、嫁入り道具をもって鳥居峠を越えてくるのは無理だったのではないか。費川や平沢からは、嫁はきた」と述べている。

明治に入り鉄道が整備されていったが、中央線が木曽路に延びるのは、明治42（1909）年以降である。奈良井駅の開業は明治42（1909）年12月であった。

[表1] 奈良井宿の既婚女性の出身地（通婚圏）

出身地	生年月日	備考
奈良井宿内 8人		
奈良井	昭和3年（1928）5月18日	※夫は上松出身
奈良井	昭和13年（1938）7月15日	※夫は平沢出身
奈良井	昭和16年（1941）9月18日	※夫も奈良井出身
奈良井	昭和18年（1943）2月7日	※結婚は東京
奈良井	昭和20年（1945）5月6日	※夫も奈良井出身
奈良井	昭和23年（1948）2月22日	※婿取り
奈良井	不明。夫は昭和20年（1945）3月15日	※夫は満州で生まれる
奈良井	不明。夫は昭和24年（1949）1月4日	※婿取り
旧木曽郡内 16人		
平沢（現塩尻市）	昭和19年（1944）1月8日	
藪原（木祖村）	昭和17年（1942）11月26日	※東京大空襲で引き上げてきた。祖母が奈良井出身
藪原（木祖村）	昭和27年（1952）7月9日	
旧日義村（現木曽町）	昭和9年（1934）7月3日	
宮ノ越（現木曽町）	不明。夫は昭和15年（1940）11月10日	
木曾福島（現木曽町）	不明。夫は昭和8年（1933）2月19日	

木曾福島（現木曾町）	不明。夫は昭和9年（1934）6月8日	
木曾福島（現木曾町）	昭和10年（1935）5月2日	
木曾福島（現木曾町）	昭和60年（1985）2月20日	
旧開田村（現木曾町）	不明。夫は昭和31年（1956）2月21日	
旧三岳村（現木曾町）	昭和42年（1967）3月29日	
上松（上松町）	昭和14年（1939）10月19日	
上松（上松町）	昭和19年（1944）7月15日	
須原（大桑村）	不明。夫は昭和2年（1927）5月17日	
南木曾町	昭和27年（1952）	
蘭（南木曾町）	昭和40年（1965）5月1日	
旧塩尻市 2人		
塩尻市街地	昭和12年（1937）3月29日	
旧塩尻市内	昭和21年（1946）8月20日	
旧松本市 3人		
松本	昭和22年（1947）2月21日	
松本	昭和24年（1949）9月10日	
松本	不明。夫は昭和17年（1942）11月30日	
他県内 6人		
山形村	昭和6年（1931）9月8日	
旧安曇村（現松本市）	昭和10年（1935）2月8日	
長野市	昭和25年（1950）2月8日	
諏訪地方	昭和27年（1952）8月17日	
朝日村	不明。夫は昭和60年（1985）7月28日	
北信地方	昭和50年（1975）1月1日	
県外 7人		
東京都	昭和8年（1933）5月12日	※父親は奈良井出身
岐阜県中津川市	昭和9年（1934）1月12日	
山梨県南部町	昭和12年（1937）9月19日	
高知県	昭和32年（1957）1月20日	
千葉県	昭和41年（1966）1月18日	
静岡県	昭和50年（1975）1月29日	
岡山県	不明。夫は昭和23年（1948）7月27日	

表1は、筆者が奈良井内の聞き取り調査で得た、昭和生まれの女性の出身地である。

調査人数は42人で、出身地は奈良井8人、旧木曾郡内16人、旧塩尻市2人、旧松本市3人、長野県内の他の地域6人、県外7人と多岐にわたる。少なくとも「隣の宿場のもう一つ向こうの宿場から」という傾向は、ほとんど

みられない。多岐にわたる理由としては、勤め人の男性の多くは営林署、国鉄、郵便局などで働いており、木曾郡内、旧塩尻市、旧松本市などへの異動があったこと、なかには進学、就職で県外に出て行った人もいることが考えられる。また、Cさんの話では奈良井では、「イエツキ」（婿取り）も多く、地元同士の結婚も少なくなかったというという。

Cさんのいう「イエツキ」も含めて、奈良井に生まれ育った女性が結婚後も奈良井に住んでいるのは、筆者の調査の範囲で昭和25（1950）年より前に生まれた人たちである。その点は、Dさんの発言とも一致する。

前出の平沢のBさんの同級生にも平沢内での結婚はなく、昭和25（1950）年生まれ以降の世代では、出会いや結婚相手の多様化が進んでいたことが推察できる。

次に、葬式と女性とのかかわりについてみていきたい。葬式の様相は高度経済成長期を経て、平成になってからも変化している。奈良井の住民から聞いた話を記す。

昭和34（1959）、35（1960）年ごろまで、結婚式や葬式は各家で行われた（昭和15（1940）年生まれ、男性）。

伝統行事がだいぶ簡単になってきた。14年前〔平成27（2015）年2月時点〕までは葬式は寺で行っていたが、10年くらい前〔同上〕から変わった（昭和9（1934）年生まれ、女性）。

葬式は、昔は寺で執り行われ、3日間くらい手伝いに行った。習わしがだんだんと軽減され、そういった点では楽になった（昭和22（1947）年生まれ、女性）。

塩尻市内に葬儀業者が数軒あり、葬儀は変わった。以前は寺でお経をあげ、公民館でお清めの席を設けた。喪家の隣組の女性たちが公民館に集まって、料理を作った。時代の流れと高齢化が進み、相互扶助はなくなったが、その分、楽になった（昭和23（1948）年生まれ、女性）。

他の地域同様に奈良井でも斎場・葬儀場の利用が一般的になっているよう

である。

住民の話をもとめると、昭和 30 年代半ばまで各家で執り行われていた葬式は、寺へと移り、清めの席は公民館に設けられた。公民館では、隣組を中心とした女性が料理をまかなった。女性たちは大変であったが、ヨソからきた若い嫁に地元の料理を教える場でもあったという。

平成に入ってから葬式は斎場・葬儀場で行われるようになり、女性の負担が軽減されるとともに、料理を一緒に作る、教えるといった関係は薄れていったことがわかる。

ここまで、主に高度経済成長期から平成にかけての平沢と奈良井の女性の役割や関係を見てきた。次節では、今日の女性がどのような関係を築いているのか、奈良井の事例からみていきたい。

3 奈良井の 50 代女性の意思と実践

地区の約 4 割の住民が 75 歳以上と高齢化が進むなかで、木曾郡内と他県から嫁いできた 2 人の 50 代の女性の話をまとめてみる。

(1) F さん（昭和 40（1965）年生まれ）の語り

F さんは宿場内にある寺の住職の妻で、木曾郡南木曾町から嫁いできた。

奈良井区には老人会はないが、女性部はある。女性部に入るのには、ある年になればという基準はなく、子育てが終わった奥さんたちなどに声がけをする。公民館行事、文化祭など女性部の部員が出る場面は多い。9 月の敬老会では女性部が公民館で会場の準備をする。11 月 3 日の文化祭では公民館役員の男性は焼き鳥、女性部はおでんを前の日から準備する。

勤めで昼間男性が少ないときに火災が発生した場合の備えとして、平成 8（1996）年に女性消防隊が結成された（結成当時の名称は婦人消防隊）。女性消防隊は訓練のとき、男性の消防団と一緒に訓練を行う。女性消防隊では、月に 1 回、夜警も実施している。

ヨソから嫁いでくると知らない人ばかりだが、子どもが生まれ保育園に通うようになると、母親同士のつながりができ始める。保育園、小学校くらい

までは育児のため仕事をもたない女性が多いので集まる機会があるが、子どもが中学生になると集まる機会は減る。しかし元気な女性が多く、女性は仲よくなると、濃いつながりができる。

奈良井では年々、外国からの旅行者が増えている。市で実施したインバウンド実践セミナーに参加してきた。また、観光協会で英会話教室を開いており、受講者は女性が多い。インバウンド対策として、外国人が何を望んでいるのか、どう呼び込んだらよいのか、思案しているところでもある。

(2) Gさん(昭和41(1966)年生まれ)の語り

千葉県内の出身で、木曾郡内の土木技術の専門校に通い、木曾で就職した。結婚後、奈良井に住み、骨董・古民具店を経営している。

平成20(2008)年から、今の店を始めた。自分の店に限らず特徴のあるものを販売し、奈良井でしかない質の高いものを買いにくるようにしなくてはいけないと考えている。八ヶ岳周辺の雑貨店やギャラリーが並ぶところと同じように、歩くだけでもよい。今、面白いと思っているのは、奈良市の旧市街地「ならまち」で、アジア雑貨、キティちゃんなども受け入れ、競争している。

町並み保存は難しいが、地元の人が守っているから維持できる。年代が変わると町並みも変わっていくのではないか。人が減って店が閉まっていくのか、軽井沢や小布施、松本のようにハイセンスになって人を呼び込もうとするようになるのか。

地元の人とヨソからきた人とは、見方が多分違う。通年暮らしている人はよいが、家が空いているから夏だけくるのはどうかと思う。1年間きちんと住んでから商売をしてほしい。重伝建地区に選定されているのだから、よそ者は住民票をとって住むようにするなど、根本から変えないといけない。

次にFさんが語っていた、インバウンド実践セミナーや英語のレッスンの目的や住民とのかかわりについて、各担当者に話を聞いた。

(3) Iさん（塩尻市雇用創造協議会前職員、男性）の語り

奈良井で実施されたインバウンド実践セミナーは厚生労働省の雇用促進事業で、2年半の事業であった。奈良井は寒さが厳しい冬の観光対策が課題である。長野県内では冬、白馬村にスキー目的の外国人が訪れるが、たとえば2週間、毎日スキーをしているわけではない。そこで、白馬から外国人を奈良井に呼んで、2泊3日のモニターツアーを行った。囲炉裏での体験や自分で作る投汁そば⁵⁾が好評であった。木曾路を歩く外国人も多いので、その後、藪原から鳥居峠を歩くモニターツアーも実施した。奈良井で行ったインバウンド実践セミナーに対し、住民の間には温度差があった。

(4) Jさん（奈良井宿観光協会職員、女性）⁶⁾の語り

外国からの観光客の増加にともない、インバウンド対策、住民の英語対応の補助として、平成28（2016）年の冬から「奈良井宿ええ会話」[英会話教室]を始めた。宿、土産物店、資料館、飲食店などの観光関係の受講者が中心で、女性が多い。「ええ会話」が住民同士の情報交換の場にもなっている。日常の出来事から外国人対応で困ったこと、奈良井の観光の今後のことなど、話題は多岐にわたり、住民の悩み解消の一助にもなっている。

4 有志のグループ「ほのか会」の活動

奈良井のある女性（昭和24（1949）年生まれ）は、「住民と話をする機会は減ってきているかもしれないが、同じ趣味の会の女性は活発に活動している。ユイの声がけがなくなって、気軽な反面、さびしい」と話す。

今日、宿場内での活動をよく聞くのが、「ほのか会」である。ほのか会の代表を務めるHさん（昭和27（1952）年生まれ、女性）から、活動内容や現状について話を聞いた。

ほのか会は平成18（2006）年に、8人のメンバーで発足した。

当時、40から50代だったHさんたちは、奈良井の観光を考えたときに、景観や塗り物はあるが「奈良井」と名の付くものがなかったことからほの

か会を立ち上げた。

初めは布で土産物品を作ってみた。いろいろな袋も作ってみたが、袋はどこにでもある。味噌も作ったりしたが、やはりどこにでもある。そのうちに行き詰まり、10年経っても進歩がないことに気付く。ほのか会のメンバーも50代後半から60代になっていた。

老後になって自慢できるものをもと思案しているうちに、奈良井に当たり前にあって、当たり前に食べている、トウブキの存在に気が付いた。Hさんの知るかぎり、トウブキは塩尻より北にはなく、大桑村より南にはない植物である。松本の人から「こんなフキみたことない」といわれたことがきっかけであった。

トウブキは8月まで葉があるが、秋になると枯れる。大きくなると背丈2mほどになる。奈良井ではトウブキを5月中旬から6月初旬に、煮物として当たり前に食べている。しかし、トウブキは自分たちが食べる分しか採らない。そこで、トウブキを使った商品を考え始めた。「奈良井が盛り上がってほしい」「飲食店や民宿で意識して使ってほしい」「高齢者の生きがい・小遣いになれば」といった思いからである。

ほのか会は、ほかに仕事をもっている女性の集まりでもあり、みな平等でやってきている。「楽しくやらなくてはいけない」という考えのもと、今も12年前と同じメンバーで運営している。

奈良井を訪れないと買えないものを販売していきたい。数は限定されているが、今、商品化しているものは5種類ある。空き家を利用して、利益を目的としない店を出し、トウブキの商品を置くことが夢となった。トウブキについてもっと勉強し、今後、本格的に商品として販売していきたいと思っている。

ここまで、平沢と奈良井の女性の関係を軸に古い町並みでの暮らしの様相についてみてきた。住民の語りを小括すると、漆器産業が衰退している平沢で聞いた、「今では息子の誰かに家業と継いでほしいと思うこともある」というAさんの語りと、「娘が蒔絵を勉強しており、次の世代での感覚で『伝統』

をつないでほしい」というBさんの語りからは、漆器作りの継承に対する意思が伝わってくる。奈良井では高度経済成長期以降、地域社会に変化があったが、旅行者が訪れるようになり、古い町並みを通じて新しい関係が築かれている。そこには古い町並みを継承していこうとする意思が受け取れる。

次章は、これまでの調査から明らかになった点を整理し、分析していきたい。

Ⅲ 家族、住民、よそ者との関係

1 漆器産業と平沢の展望

日本人の生活スタイルの変化にともない衰退していった漆器産業だが、平沢では女性も役割を担ってきたことがわかった。

平沢の漆器産業の衰退の理由として、「安いプラスチック製品が普及した」「生活が洋式化し、ちゃぶ台の需要が減った」「自宅で結婚式や葬式を行わなくなり、各家で箱膳や食器が大量に購入されなくなった」「バブル経済破綻後、ホテル、旅館での漆器の需要が減少した」というような話をこれまで聞いてきた。しかし、Bさんによれば、漆器に適さない電子レンジ、食器乾燥機、食器洗浄機などの普及が、漆器が購入されなくなっていった理由の一つであったという。家電製品の発達は、女性の社会進出とも大きくかかわっているといえる。

Aさん、Bさんの2人の話から漆器作りは男の職人だけではなく、女性(妻)が手伝う協働作業であるとともに、経理や発送などの事務的な面も女性が担ってきたことが明らかになった。平沢に多くの檀家をもつ、奈良井のT寺の前住職で前出のCさんによると、役割の性差について「平沢は子どもに男がいても丁稚に出して、娘が残った。家業を女性が経営している部分もあった。男は因業で女は鷹揚なところがある。営業、接客の対応をするのは、女性のほうがよい。とくに漆器の場合、女性が料理を作り、美しく盛りつけることもできる」という。

女性は男性の仕事を手伝う一方で、家事もこなさなければならず、寒冷の

地の平沢での水仕事のつらさなどが A さんの話から伝わってきた。A さんは、漆器産業が衰退していることと、子どもたちにやりたいことがあることから家業の継承へは至っていないという。あわせて、漆器職人の妻として職人の苦勞を目の当たりにしてきたことや、自身も苦勞してきたことから、かつては子どもたちが職人になることを望んでいなかった様子がかがえた。

奈良井の重伝建地区選定から 28 年後に重伝建地区になった平沢では、家の修理、修景が進み、徐々に昔のような町並みを取り戻している。しかし、観光とは結びつかず、旧中山道を歩く人はほとんどいない。漆器産業が斜陽であるのと、国道 19 号線沿いに観光バスも駐車できる大型の漆器販売店などがあり、車で訪れた旅行者は重伝建地区には立ち寄らず、国道沿いの店で買い物を買ってしまうことが理由といえる。

重伝建地区には漆器店が立ち並ぶものの普段は店内の明かりをつけずに、ひっそりとしている。客が来店すれば明かりをつける。客がこないから明かりをつけないのか、明かりをつけないから客が店内に入らないのか、という語りが平沢の住民ばかりでなく奈良井の人たちからも聞かれた。

木曾平沢保存会前会長の L さん（昭和 27（1952）年生まれ、男性）は「これからは価値観が変わり、地方のよさ、つながりのよさが見直されるのではない。保存会では、町並み保存と地域の活性化に努めていきたい」と語る。平沢の集客が弱い点として、喫茶店や休憩所など旅行者が足を休めるところがないという指摘があるが、保存会では旧檜川村村長だった滝沢重人氏（故人）の邸宅を平成 27（2015）年 5 月より一般公開している。

それでも筆者のみるかぎり、今も平沢の町は静かである。「職人氣質」という言葉があるが、漆工町で職人が多い平沢と江戸時代に宿場町として旅人を受け入れてきた奈良井とでは、隣の集落でありながら「^{じんき}人気」の違いがあるといえるのではないだろうか。

前塩尻市教育委員会の石井健郎は宿場町の整備と活用のなかで、「もともと宿場町が歓待の精神（ホスピタリティ）を有している」ことを指摘している [石井 2010 : 118]。

一方で石井は筆者に対し、「平沢は誰かが訪れたらもてなす気風が残ってお

り、外部の人間でもなじみになれば家でお茶などを出す」と、歓待の精神があることも語っている。実際、一見客には営業しているのかわかりづらい漆器店に入ると、店内の照明を点け、丁寧に対応する様子が確認できる。

今後、平沢の住民が観光に重きを置いて、Lさんのように「地方のよさ、つながりのよさ」から「地域の活性化」を進めていくのだとすれば、歓待の精神を前面に出せるような住民の意志が必要なのかもしれない。

2 奈良井の新しい関係

奈良井の事例から明らかになったのは、通婚圏が多様化し、ヨソから嫁にくることが当たり前となっていったということである。

葬式の様相も変わっていき、女性の負担が減って楽になったが、その反面、女性の関係が薄れていった様子がうかがえる。一方で旅行者が訪れる奈良井では、新しい関係が女性を中心に生まれていることが確認できた。

奈良井のFさんの話からは、他地域同様、子どもを介して女性のつながりが築かれていることがわかる。女性消防隊の活動からも奈良井では家屋を大切に守っていることがうかがえる。また近年、増加する外国からの旅行者に対して、積極的に取り組もうとする女性たちがいる。

Iさんによると、体験が外国人に好評だったという。奈良井で食事処を営み、インバウンド実践セミナーにも参加していたKさん（昭和23（1948）年生まれ、男性）も体験の重要性を訴える。Kさんのこれまでの経験では、タイの人が五平餅作りの体験をして、喜んでいて、また毎年、冬に台湾の学生が30人くらい訪れ、五平餅作り体験をしているという。体験を通じ、最終的に人のつながりを持って帰ってもらうことで、リピーターが増えると語る。

店で実際に接客対応するのは、主に女性である。また、筆者の知る民宿の主人（男性）たちは英語が話せたり、パソコンを使ったりして、外国人と対応していた。そのため英語やパソコンに自信のない女性が「ええ会話」に通っていると考えられる。

また、Iさんのいう「住民の間に温度差があった」というのは、Fさんのように積極的に外国人とかかわろうとする人たちがいる反面、高齢で外国人

とあまりかわりたくないという人がいることがその理由と推察できる。

Gさんの発言は、宿場内で似たようなものを販売するより、個性を出していったほうがよいといった建設的な意見である。古い建物だけではなく、旅行者が歩いていて楽しいと思えることを重視する反面、よそ者が商売をすることに対しては厳しい目線であるといえる。

Hさんは奈良井の隣の藪原から嫁いできて、現在では食事処を営んでいる。彼女の語りからは、奈良井に対する強い意思や愛着が伝わってくる。12年も同じメンバーでやってこられたのは、ほかの仕事を抱えつつも、無理をせず、楽しみながら取り組んできたからだといえるだろう。

奈良井内での土産物として販売されているものはこれまでの主産業であった、漆器、曲げ物、櫛などで、食べ物ではそば、五平餅、おやきを出す店が多い。しかし、そば、五平餅、おやきなどは、今日、長野県の各地でみかけるものである。そこで、奈良井独自の商品を作ることが、ほのか会を結成した動機である。この点は、Gさんの「特徴のあるものを販売し、奈良井でしかない質の高いものを買いにくるようにしなくてはいけない」と意思は同様である。

そして、自分たちが「当たり前」と思っていたトウブキに着目した。これもよそ者である松本の人の言葉が、住民たちにとって「当たり前」のものに気づかせたことが大きかった。

筆者のこれまでの奈良井での聞き取りでは、「きれいな町並み」「生活感があり、他の宿場町よりよい」という旅行者の声に住民は喜びを感じている。旅行者と会話をするのを楽しみにしている1人暮らしの高齢の女性、旅行者と話すことを目的に自宅で小さな店を始めた女性たちもいる〔荒井 2017: 40〕。

先行研究のところでふれた、蓬田が指摘する「男とおなじように仕事ができる」「こどもや孫のためにがんばる」という女性たちの「やりがい」とは違い、古い町並みを通じ旅行者とかかわることで、奈良井の女性たちは「喜び」や「楽しみ」を見出している。

3 助け合う関係と「うたかたのような家族」

田中宣一は高度経済成長期に機械化が進み、また自治体が補完していくことで、地域の互助協同の機会が少なくなっていったことを指摘している [田中 2011 : 339-356]。

奈良井の女性は、他の地域のように葬式などの互助協同の機会がほとんどなくなりつつある反面、女性消防隊やほのか会のような活動、住民たちによる雪かき（雪かきは女性も参加する）、外国からの旅行者の対応など、女性住民の関係が構築されているのは、古い町並みが残り、また、そこを訪れる人たちがいるからだといえる。

雪かきに関していえば、住民の間からはつらい、しんどいという声が多々聞かれる。しかし、前出の石井によれば、「奈良井や平沢の住民からは除雪の依頼は届いておらず、自助努力によってまかなわれている。塩尻市内には深刻な地区は他にもある」と話す。

田中のいう「自治体の補完」がなされていないから、奈良井や平沢では大変ながらも雪かきで隣近所の関係が続いているとみることもできる。つまり、今のところ自分たちで何とか雪かきができているので、自治体に補完してもらわなくても大丈夫だが、ただし、この先はわからない。

さらに、初めに述べたように「買い物難民」という言葉が奈良井の住民から聞かれる。筆者が聞いたところでは、週に1、2回、塩尻市街地でまとめ買いをするという回答した人が多い。うっかり、何か1品切らしていたときには、わざわざ買いに出かけるのも大変なため、近所の人に「借り」に行くこともあるという。たとえば、器をもっていき「味噌が切れていたので少し貸して」といった具合である。不便な生活を補うため、助け合うといったこの地区の強い絆や人情が存在しているといえる [荒井 2017 : 34-35]。

筆者のこれまでの調査では、古い町並みを維持しながらも先祖からの土地や家屋に執着する住民の語りはほとんど聞かれなかった。町並み保存後の世代が地域の外に出て行ってしまい、「子どもたちに戻ってきてほしいとは思いますが、戻ってくるかはわからない」という諦念のようなものがうかがえた。

奈良井へ戻ってくるためには、子ども本人の意志だけではなく、配偶者の

意志、本人の子ども「奈良井の住民にとっての孫」や義理の父母の生活環境のことなど、多様な制約もあるだろう。

以上のように、筆者の調査の限りにおいて、生活が不便な分、女性は相互で助け合うために関係が築かれているとみてとれる。しかし、家族との関係においては、他の地域のように津上のいう「うたかたのような家族」である様子がうかがえる。

4 新住民の「覚悟」と家の継承

Ⅱ-2で述べた通婚圏において、奈良井で「イエツキ」の結婚があったのは、筆者の調査の範囲では昭和25（1950）年より前に生まれた世代であり、彼女たちが結婚したと思われる1970年代ごろまでは、イエの継承という意識が住民のなかにあったことが推察できる。

奈良井に嫁いできたある女性（昭和9（1934）年生まれ）は、「今風の家から嫁いできた嫁は住みにくい」という。

奈良井宿では、前述した「売らない・貸さない・こわさない」の決まりごとが住民のなかで「暗黙の了解」として存在している。この決まりごとは、不動産業や外部資本などが保存地区内に突然参入することを防ぐことで、景観を維持することに対し、大きく機能してきた。しかし、空き家が増えていく今日、よそ者が移住できないといった問題と密接にかかわっている。これは、イエではなく、家という建物の継承の問題にもなってくる。

Ⅰ-3で述べたように、今後、奈良井の住民は新住民とともに生きることになる。

新住民は、鈴木の論考にもあるよそ者でもある。これまでヨソから商売にきた人が、商売が成り立たないとわかるとすぐに引き上げてしまったことがあったという。ここでGさんが述べた「1年間きちんと住んでから商売をしてほしい。重伝建地区に選定されているのだから、よそ者は住民票をとって住むようにする」といった言葉が重みを増してくる。

一般的な住宅地では、1戸建てが空き家になっても新たな住民が引っ越してくる。新しい住民は家屋を建て替えることも可能である。しかし、重伝建

地区という文化財のなかの家屋では、空き家を取り壊して更地にすることも、建て替えることにも制約がある。空き家となった古い建物に住むためには、水回りなどのライフラインを修理、整備する必要も出てくる。

生活環境が変わるなかで、奈良井で暮らすということは、好むと好まざるにかかわらず旅行者との関係をもつことにもなる。関係とは、旅行者と会話ができる、商売ができるといった肯定的な面と、常に旅行者の目にさらされるといった否定的な面とがある。また奈良井では、これまでも女性を中心に、生活するうえで家屋内の暗さや寒さの不満を聞いてきた。「買い物難民」の問題も抱えている。

新住民がどこまで奈良井で暮らしていく「覚悟」があるのか。新住民には若い夫婦もいるようなので、新住民の女性をこれまで奈良井に住む女性たちがどのように受け入れていくのか、そしてどのような関係を構築していくのか。

それでは、平沢ではどうか。Ⅲ-1でふれたように、長年、平沢をみてきたCさんが「営業、接客の対応をするのは、女性のほうがよい」というように、職人氣質がうかがえる町だからこそ、営業面では女性が重要な役割を担っているといえる。そして、Kさんの言葉を援用すると「住民との間にできたつながりを旅行者に持って帰ってもらう」ことができるのか。そのためには、鈴木が取り上げた富田林市の事例のように、よそ者であっても、強い意志をもった女性が旗を振ることが重要といえるであろう。

さらに鈴木は、宮城県岩出山町（現、大崎市）で起業した住民女性の活動から、次のように指摘している。

将来にわたって地域に関わっていきたいという思いが、起業のインセンティブになっていることを、見落としはならない。「生活者」や「地域」の視点が、女性の起業に強く現れている [鈴木 2005：92]。

そして鈴木は、「地域と積極的に関わる道が開かれるとき、女性は地域づくりの主体へ成り上がる」と述べている。地域に積極的にかかわりやすいのは、これまでのコミュニティのなかでのしがらみが少ない、よそ者であるのかも

しれない。そのように考えると、生まれ育った住民であろうとヨソからきた住民であろうと、「地域への思い」が強ければ区別はない。

「地域への思い」について、もう少し検討していきたい。

IV 地域への「思い」から「誇り」への転換

1 自伝的記憶の重層化

これまで述べてきたように、奈良井には子どもを介してのツキアイ、女性消防隊、有志の集まりといった女性のつながりを築く場がある。Fさんによれば、女性は仲よくなると、濃いつながりができるといふ。ほのか会が12年間も同じメンバーで活動してきたのはその証左といえる。

奈良井のFさん、Hさんたちの語りから受け取れるのは、「地域を何とかしようという思い」である。その「思い」が諸活動の根源になっているのではないだろうか。これまでも、木曾路の女性たちからは、故郷より嫁いできた今の場所がよいという話を聞いてきた。前述の奈良井の女性の「喜び」や「楽しみ」もその理由の一つになろう。「住めば都」という慣用句が示すとおり、その地域で住み続けることにより、自伝的記憶⁷⁾が重層的になる。そのような過程で「地域への思い」が形成されていくのだと考えられる。

つまり、以前の旧宿場内での結婚と違い、ヨソから嫁いできた女性は知らない土地で、夫や子どもという家族との関係を深めていく。そして、住民あるいは旅行者という他者と関係をもつことになる。高度経済成長期以降、核家族化が進んでからも、奈良井や平沢でしゅうと同居、もしくは同じ敷地内に二世帯で暮らしてきた嫁も少なくない。ヨソからきた嫁はしゅうとから地域のよいところ、悪いところを教わりながら、家族の一員と認められるように努めてきた。妊娠、出産のときには、「女性の先輩」である姑に頼ることも多くなる。

子供が生まれれば子どもを介して地域の女性たちと横のつながりができてくる。そのなかで、気の合う仲間との関係が深まり、奈良井でいえば、ほのか会に代表されるように、同世代での仲よしグループがつくられている。そ

して、それらの仲間と一緒に地域の活動などへ携わることで帰属意識が生じてくるのだと推察される。そのように、嫁いだ土地でさまざまな経験を積み、嫁いできた女性は家族や住民との自伝的記憶を重層化させていくのではないだろうか。

さらに、自分たちが住む地域に対して、外部からの評価が加わることにより、「思い」が「誇り」へと転換されていくものと考えられる。

奈良井という重伝建地区でみていくと、旅行者から「きれいな町並み」といわれることで住民たちも「古い町並みへの誇り」である。

奈良井の町並みは、時代劇のセットとは違う。実際に、そこで住民が生活を営んでいるのである。そして時代を経れば経るほど、その希少価値は増していく。一度、現代的になった町並みをかつての町並みへと再生させることは困難である。

女性たちは自分が住む古い家屋には実生活において不満があり、イエの継承については「うたかたのような家族」である。それが、古い家屋の集合体である「町並み」となると、その「誇り」が発揮されるのが特徴である。「古い町並みへの誇り」があるからこそ、「町並みの美化に努める住民たちの関係」や「地域を何とかしたいと思う人たちの関係」などが生じてくるのである。

一方で、重伝建地区に選定されて12年の平沢では、町並みの整備が進んだものの奈良井のような「古い町並みへの誇り」はまださほど感じられない。「古い町並みへの誇り」は住民の意識のなかで生成の途中なのかもしれない。それよりも、江戸時代より続く伝統工芸である漆器に対する思いが強い。平沢の漆器が評価され、Bさんが語った「3本足でも売れる」という時代を経験してきた。漆器という作品には、職人である男性の名前が表に出るが、協働した女性の名前が出ることはない。それでも、平沢の女性は陰になり日向になり漆器産業を支えてきたのである。

むしろ平沢にいえるのは、「伝統の技を守っていかうとする関係」や「男女の協働作業で努力してきた関係」から成り立ってきた「漆器という伝統への誇り」である。

2 地元に密着した女性の視点

これまで述べてきた平沢と奈良井について、対比させたのが表2である。

[表2] 平沢と奈良井の比較

平沢		奈良井
平成 18 年 (2006)	重伝建地区の選定年	昭和 53 年 (1978)
漆工町	重伝建地区の種別	宿場町
漆器作り・販売	現在の主たる生業	旅行者への商売
職人氣質	人気	歓待の精神
漆器という伝統への誇り	地域への誇り	古い町並みへの誇り

小稿でいう「誇り」とは、先ほど述べたように、必ずしもその土地で生まれ育った人が抱く意思だけではない。自伝的記憶を重層化させていくことで生成されていくものと考えられる。つまり、よそ者でもその土地にかかわりを持ち、その土地のよさを見出し、その土地を気に入り、その土地が他者から評価されれば「誇り」となるのではないだろうか。

Bさんの話では、平沢において漆器の技は長子に相伝されてきたという。また、かつては平沢内部の人間同士で結婚をしていたという。つまり、内部で結婚することにより、平沢の人間が外部へ拡散していくのを抑止していたのではないか。これは、漆器の技を継承させ守っていく、職人の町ならではの仕組みだったことがうかがえる。さらには、技が外部へ流失するのを防ぐことにも有効な仕組みであったと考えられる。

実際、平沢の人からも奈良井の人からも、平沢は親戚縁者の非常に多い集落だという話を聞く。

そして、その仕組みがあることに加え、「職人氣質」という気風があることで、重伝建地区になっても、旅行者からは一見「閉鎖的」と思えるような集落になっているのではないだろうか。親類縁者が多いということは、平沢という土地で暮らすことで、すでに後藤のいう「選べない縁」が成り立ち、地域を守っている集団ととらえることもできるのではないか。いわば、「漆器という伝統への誇り」が内に向いているのである。

よって、Lさんのいう「地域の活性化」を進めていくのであれば、地域と

しがらみのない、よそ者の女性の活動が期待される場所かもしれない。

一方で、旅行者を迎え入れてきた奈良井では、「誇り」のベクトルが平沢とは異なると考えることもできる。旅行者を介して、地域のために役割を果たそうとする「古い町並みへの誇り」が見受けられるからである。ほのか会の活動もインバウンド対策への活動も、女性たちが「古い町並みへの誇り」を持っているからこそであるといえる。

ただし、平沢では新しい動きもある。すでに述べたようにBさんの20代の娘は、家業の事務を手伝うかわら、蒔絵を勉強しているという。あるいは、平沢の住民で春慶塗を独自で研究し、各地で個展を開いている職人もいる。

平沢のBさんの「伝統」は変化していくものという考えの下、娘らに対し、次の代は次の感覚で、「伝統」をつなげていってもらえればよいという。また、奈良井のHさんは、「女性は女性の考えで、若者は若者の考えでやっていけばよいと思う」と語る。

世の中の移ろいが激しい今日において、鈴木という「生活者」や「地域」の視点をもつ女性の役割が、より大きくなるのではないだろうか。

「漆器という伝統への誇り」と「古い町並みへの誇り」という二つの誇り。住民と住民、住民とよそ者との関係の核（結節点）でもある古い町並みが、今後継承されていくうえで、これらの「誇り」が重要な要素になりうるといえるだろう。

おわりに

小稿では、2か所の重伝建地区の女性の役割、関係を中心にみてきたが、イエの継承に関しては、さらに住民の関係をみていくとともに、地元の人がいるところの「若い衆」についても調査を進めていく必要がある。

なお、空き家に買い手が着いた奈良井の新住民の家屋は、平成30（2018）年8月の時点では、修理中などで、新住民はまだ本格的には移り住んできている様子はなく、聞き取りができなかった。新住民と「現住民」の関係をみていくことも今後の課題として残った。さらに研究を深めていきたい。

注

- 1) 旧橋川村平沢地区は、平成 17 年（2005）の塩尻市との合併の際、地名を木曾平沢と変更し、また重伝建地区では木曾平沢の名で登録されているが、小稿では平沢で統一する。
- 2) 小稿では、住民に対する他者という意味で「よそ者」の表記を使う。なお、ヨソから嫁いできた女性住民もよそ者に含む場合がある。また、一過性のつながりとなる観光目的の人たちは基本的に「旅行者」で統一する。
- 3) 電子辞書『広辞苑 第六版』[新村出編]によると、意志は「物事を成し遂げようとする、積極的な心の状態」とあるのに対し、意思は「考え。おもい。」である。小稿では、住民の心意を広くとらえるために、意思にも考慮したい。
- 4) 慶長 6（1601）年以降、江戸幕府から木曾の住民に下賜されることになった白木御免木 6000 駄のうち、奈良井（平沢を含む）には、その約 4 分の 1 にあたる 1521 駄が振り当てられていた。ちなみに隣の藪原は 177 駄、代官所や関所があった福島は 310 駄に過ぎなかった [長野県文化財保護協会編 1980 : 301] [南木曾町・奈良国立文化財研究所編 2004 : 255]。
- 5) 投汁籠と呼ばれるタケで編んだ網目状のお玉にそばを入れ、キノコや野菜、鳥肉などで煮込んだつゆにくぐらせて食べる。県内の旧奈川村（現松本市）の投汁そばが有名。
- 6) Jさんは、かつてイギリスに約 7 年間在住していたという。
- 7) 認知心理学が専門の高橋雅延は、自伝的記憶ことを、「個人の過去の出来事や経験にかかわる記憶」と述べている [高橋 2000 : 229]。

参考文献

荒井浩幸

2017 「旧宿場町に生きる ―木曾路・奈良井宿を事例に―」『信濃』69（1）：23-45。

石井健郎

2010 「宿場町」『日本の生活環境文化大事典―受け継がれる暮らしと景観―』、日本民俗建築学会（編）、pp. 118-121、柏書房。

内山節

2012 『内山節のローカリズム原論―新しい共同体をデザインする―』農山漁村文化協会。

倉石あつ子

2009 『女性民俗誌論』岩田書院。

小池誠・信田敏宏

2013 「序論 生をつなぐ家―過去から未来へ―」『生をつなぐ家 親族研究の新たな地平』、小池誠・信田敏宏（編）、pp. 1-19、風響社。

児玉幸多（校訂）

1971『近世交通史料集5 中山道宿村大概帳』吉川弘文館。

後藤知美

2018「排除し繋がる女性たち—ある町並み保存活動をめぐる考察—」、古家信平（編）、pp. 188-206、『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館。

市民タイムス

2018年『市民タイムス 塩尻』1月18日（日刊第15285号）市民タイムス。

鈴木裕範

2005「地域コミュニティ再生を担うのはだれか～女性・高齢者が主体の地域づくり～」『経済理論』324：77-103。

2010「寺内町におけるコミュニティと住民合意の形成をめぐって—今井町・富田林市の景観保存とまちづくり—」『和歌山大学経済学会 研究年報』14：671-683。

高橋雅延

2000「記憶と自己」『記憶研究の最前線』、太田信夫、多鹿秀継（編）、pp. 229-246。

田中宣一

2011「地域の互助協同と高度経済成長」『国立歴史民俗博物館研究報告』171：pp. 339-358。

津上誠

2013「現代社会の『小さな「家」』『生をつなぐ家 親族研究の新たな地平』小池誠、信田敏宏（編）、pp. 293-317。

長野県文化財保護協会編

1980『中山道信濃二六宿 信濃毎日新聞社』。

南木曾町・奈良国立文化財研究所編

2004『日本の町並み調査報告書集成 第6巻 中部地方の町並み〈3〉』東洋書林。

桧川村誌編纂委員会編

1996『伝統と谷を生かして 木曾・桧川村誌 第5巻 現代編』長野県木曾郡桧川村。

奈良文化財研究所・桧川村町並み文化整備課編

2005『木曾平沢 —伝統的建造物群保存対策調査報告— 桧川村町並み文化整備課』。

安室知

2003「稼ぎ」『暮らしの中の民俗学 2 —1年—』、新谷尚紀、波平恵美子、湯川洋司（編）、pp. 97-123、吉川弘文館。

読売新聞生活情報部編

2008『つながる 信頼でつくる地域コミュニティ』全国コミュニティライフサポートセンター。

蓬田伸光

2012「山に生きる女たち」『現代民俗誌の地平1 越境（普及版）』、篠原徹（編）、pp. 124-148、朝倉書店。

和田健

2010 「民俗学は社会から何を見るのか？ 一場と個人をめぐる方法的態度」『日本民俗学』
262 : 52-76。